" FUKUSHIKEN JOURNAL " IS A FREE PAPER PUBLISHED BY HIBINOSEKKEI + FUKUSHIKEN.
TOPIC: 'COMPLEX FACILITY FOR CHILDREN' , 'THE LATEST NEWS OF SNOEZELEN' , 'THINKING ABOUT WELFARE AS THE TIMES CHANGE' , 'STAFF INTORODUCTION' , 'FUKUSHIKEN NEW PROJECT' ,
PUBLISH: HIBINOSEKKEI PUBLISHING EDIT&INTERVIEW: MIHO HASEGAWA INTERVIEWEE: HIROKO WATARAI / YASUHIRO MINE / TAKASHI URAGI / YUKI ISHIYAMA
PHOTO: HIBINOSEKKEI + FUKUSHIKEN / STUDIO BAUHAUS WEBSITE: HIBINO-FUKUSHI.COM

FUKUSHIKEN JOURNAL

"福祉研ジャーナル"

高齢者や障がい者のための施設を専門に設計する、日比野設計＋福祉施設研究所が発行するフリーペーパー。介護・障がい者施設に関する情報や最新のプロジェクト等を紹介します。

vol.02
2022
TAKE FREE

▲SLP センターアーク：東京都東村山市で 60 年に渡り重症心身障害者支援に取り組んできた法人が、児童発達支援・保育・診療・相談を、同一建物で行うインクルーシブな環境を整え、誰でも身近な地域で家族ともに安心して暮らせる社会を作ることを目的としたプロジェクト。中庭を挟んで児童発達支援センターと保育園を配置することで、日々の生活の中で療育を受ける子どもと保育を受ける子どもが自然に出会う空間となっています。

施設の紹介動画はこちらからチェック！▶

01
Complex facility for all children
医療 × 福祉 × 保育を叶えた
すべての子どものための複合施設
SLP センターアーク

02
The interview of latest news of snoezelen
日本のスヌーズレン研究の第一線で活躍される
嶺也守寛教授に、スヌーズレン最新情報
についてインタビューしました。

03
HIBINOSEKKEI + FUKUSHIKEN Thinking about welfare as the times change
福祉施設研究所
時代が変化する中で考えること

04
Introduce the Latest Projects of HIBINOSEKKEI + FUKUSHIKEN
日比野設計＋福祉施設研究所の
最新プロジェクト紹介

What' s HIBINOSEKKEI + FUKUSHIKEN?

1972 年に創業した株式会社日比野設計の福祉施設設計のブランド。日比野設計＋福祉施設研究所が携わった施設は全国に及ぶ。株式会社日比野設計では、他にも幼児施設専門設計のブランド「幼児の城」、幼児施設インテリア設計のブランド「KIDS DESIGN LABO」、カフェ＆レストラン「2343 FOODLABO」や、保育園「KIDS SMILE LABO」、マルシェ「ICHIGO MARCHE」を運営し、施設設計と運営のノウハウを活かし、様々な事業を展開している。2018 年には中国にも事務所を構え、現在中国でも 40 件以上のプロジェクトに携わっている。

株式会社日比野設計 / hibinosekkei.com
【本社】 〒243-0213 神奈川県厚木市飯山 2343 / 046-241-3339 【支社】 〒243-0014 神奈川県厚木市旭町 1-7-3 3F / 046-230-6155

HIBINOSEKKEI
youji no shiro
2 3 4 3 Farm and Market to Your table. FOODLABO
FUKU SHI KEN
Nursery and Daycare KIDS SMILE LABO learn,play,eat,sleep,challenge with love

医療×福祉×保育を叶えた すべての子どものための複合施設！

東京初!?

社会福祉法人天童会　SLP センターアーク　センター長

渡会 博子 わたらい・ひろこ

「まさか自分がセンター長になるなんて・・・！」と話す SLP センターアークの渡会さん。竣工して約 1 年が経った今、医療 × 福祉 × 保育の複合施設をどのように運営しているのか、現状をインタビューしてきました！

◀天童会 HP

SLP センターアークってどんな施設？

医療的ケアや特別な支援が必要なお子さんを含めた未就学児に対して、通園（児童発達支援、事業所内保育所）、小児科クリニック、訪問（保育所等訪問支援、居宅訪問型児童発達支援）児童相談を行う複合施設。あらゆる専門性をもつ職員がいるため、“誰もが”安心して通える施設となってます。

子どもが幸せになれる事業を考える

元々は理学療法士として秋津療育園の重症心身障がい者のリハビリを担当していましたが、2018 年から、ここの立ち上げメンバーに。「子どもが幸せになれる事業を！」と始まり、医療・福祉・保育の複合施設が生まれました。障がいの有無関係なく、どこで生まれても、地元で安心して生活ができる社会を目指したいです。また、保護者にとっての幸せももちろん大切。営業時間を長めに設定して、仕事と子育ての両立を叶えたいパパママを応援しています。

今後の課題は？

2021 年 1 月に竣工して約 1 年経過。預かるお子さんやご家族の視点に立って日々試行錯誤してきました。営業時間が長いため研修時間の確保には工夫が必要と感じています。2 年目を迎える今、スタッフの働き方を改めて見直し、運営モデルを作っていきたいです。

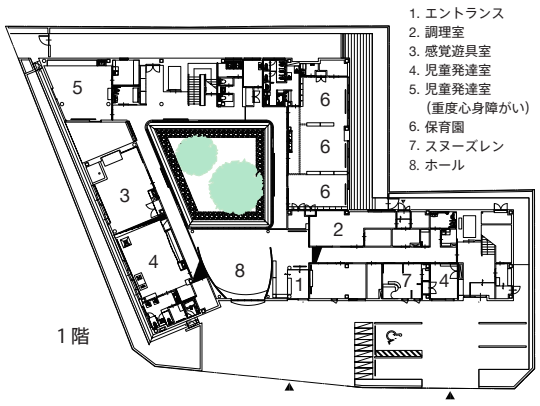
子どもたちのお気に入りの場所は？

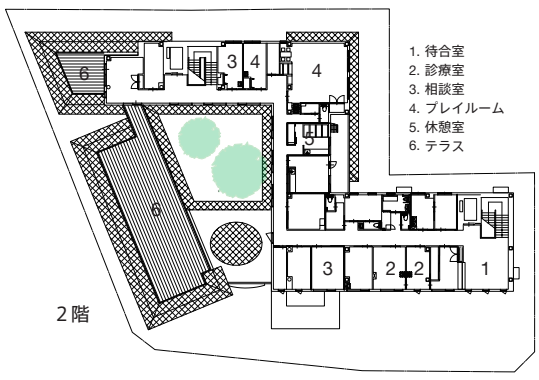
1 すべり台とあなぐら

階段の横に作られたすべり台と狭くて落ち着くあなぐらスペース。日常生活の動線にある遊び場で「遊びたい！」という気持ちが刺激されます。

1 スヌーズレンルーム

子どもから「きらきらルーム」と呼ばれている人気のお部屋で、東洋大学の嶺先生が製作したバブルチューブもあります。各々のペースで遊びながら心を落ち着かせています。





自然と交流が生まれる

普段は別の部屋で生活をしていても、施設内で自然とお互いの存在を認識し、交流できる環境となっています。例えば、エントランスが 1 つであること、中庭を中心に回遊できること、遊び場が日常生活の動線上にあることなど。合同で行う誕生会や季節の行事は、子どもたちの交流が深まるだけでなく、スタッフ同士が連携しながら学び刺激し合う機会にもなっています。

子どもにはどんな効果が？

普段は自分でコップを持ってお茶を飲むことをしない児童発達支援のお子さんが、保育園のお子さんと交流した後に、自分でコップを持ってお茶を飲もうとしたことがありました。また、保育園に通うお子さんの会話の中に、普段は一緒に生活をしていない児童発達支援のお子さんの名前が出てきた時はとても嬉しく思いました。自然に交流できる環境があるからこそ生まれた出来事だと思います。このような経験の積み重ねで、良い影響を与え合って、障がいの有無で分けることなく、ともに育ち合える場所にしていきたいです。

スヌーズレン最新事情！

東洋大学 ライフデザイン学部 人間環境デザイン学科 教授

嶺 也守寛 みね・やすひろ

SLP センターアークのスヌーズレン導入・運用にも携わり、日本のスヌーズレン研究の第一線で活躍されている、東洋大学の嶺 也守寛教授。スヌーズレンの開発から製作までも行う嶺先生に、スヌーズレンの最新事情を聞いてきました！

◀ISNA 日本スヌーズレン総合研究所 HP

スヌーズレンとは？

ーそもそもスヌーズレンって何なのでしょうか？

定義としては、1970年代にオランダで Jan Hulsegge & Ad Verheul が、1日中ベッドで横たわり、全く刺激のない環境で過ごす重度知的障がい者のために実践した多重感覚環境のことを指します。私の研究室では、スヌーズレン器材の三種の神器の1つとも言われている「バブルチューブ」を国産スヌーズレン器材として開発しているところです。バブルチューブの仕組みとしては、アクリルチューブの中に水を満たし、下からエアーポンプで気泡を出しながら LED ランプの光を当てることで幻想的な雰囲気を作ります。LED ランプに照らされた上昇する気泡が視覚を刺激し、気泡が出る時の音やエアーポンプの振動によって聴覚や触覚を刺激するスヌーズレン器材です。

スヌーズレンという言葉自体は広まってきましたが、スヌーズレンに対して明確なイメージを持っている方は意外と少ないなと感じます。日本にスヌーズレンが入ってき三十年以上経っている今も、国内におけるスヌーズレンに関する環境や器材の研究開発は、全く行われていないのが現状なんです。

高齢者施設・保育園・企業効果は子どもから大人まで

ー日本での普及はまだこれからとのことでしたが、世界的にはどう発展をしているのでしょうか？

もともとは、重度の知的障がいを持つ人のための考え方でしたが、今ではヨーロッパを中心に、高齢者施設や幼稚園など、あらゆる所で導入されていて、高齢者にとっては、認知症対策になると言われています。さらには、企業のオフィスにも導入され、労災が減ったという報告もあるんです。心の問題は人間みんな共通ですし、大人も子どもも、障がいのある人もそうでない人も、スヌーズレンは有効だと言えると思います。

ー実際に使用している施設の方からは、どんな声がありますか？

今年、私の研究室の学生が SLP センターアークで調査を行いました。その中では、「スヌーズレンルームを利用することで、児童一人一人について好みや性格、特性をよく知り、理解することができる」、「スヌーズレン器材の前にいる子どもを観察することで、視力や聴力の程度を把握することができる」という声もあり、メリットは職員にもあると言えます。さらには、職員の方々が帰宅前に利用することもあり、一日をゆっくり振り返ったり、気持ちを切り替えたりできる場にもなっているそうです。子どもへの効果だけでなく、大人への効果も広く伝えていけたらと思います。

スヌーズレンはフレキシブルな空間で

ースヌーズレンにはどのような空間が求められますか？

通常だと、何もない部屋にどうスヌーズレン器材を導入するかという相談が来るので、SLP センターアークで設計の段階から関われたのは貴重な経験でした。空間に関しては、一概にこういう空間が良いと言うのは難しいですね。暗い部屋が落ち着く子もいれば、明るい部屋が良い子もいる。また、気分を高揚させる赤系の光が好ましい子もいれば、気持ちを落ち着かせるブルー系の光が好ましい子もいます。さらに、狭いところが落ち着く子もいれば、そうでない子もいる。その子その子の特性や好みに合わせて対応ができる、フレキシブルな空間が一番良いと思います。

スヌーズレンの可能性を広げたい

ー今後はスヌーズレン研究をどのように発展させていきたいですか？

これまで主にバブルチューブの開発を中心に進めてきましたが、バブルチューブ以外の器材の開発にも力を入れていきたいと思っています。最近では、光ファイバーの技術をもつ企業から、スヌーズレン器材の開発に役立てないかという問い合わせを受け、新たなスヌーズレン器材の開発を進めているところです。日本には、あらゆる分野の専門的な知識と技術を持っている企業が多くあります。それぞれの専門性とアイディアを持ち合わせれば、国内でも高品質で手頃なスヌーズレン器材が作れると思います。海外産の市販品に頼らざるを得ない現状を変え、障がい者施設だけでなくあらゆる施設がスヌーズレンを気軽に導入できるようになることを期待しています。

ーまだまだ未開拓のスヌーズレンの分野に、嶺先生が今後どのような一石を投じるか、期待＆注目しています！

設立から17年が経った福祉施設研究所。時代が変化していく中で考えることとは？

福祉施設研究所　所長
裏木 隆　うらぎ・たかし

2005 年に設立した福祉施設研究所。福祉研究所の所長を勤める裏木さん。眩しいほどの笑顔で場を和ませてくれる裏木さんに福祉施設の専門家としての意見から、仕事への想いをインタビューしました！

福祉施設研究所 HP　福祉施設研究所 ブログ　福祉施設研究所 Facebook

高齢者施設の最近の傾向

ー長引くコロナ禍で、高齢者施設設計の考え方に変化はありましたか？

福祉施設において感染症の対策は、実はコロナ禍以前からの課題でした。しかし、感染力も高く直接死に繋がるリスクのある新型コロナウイルス（以下、略称：コロナ）の影響で、福祉施設のあり方にも変化が見られます。例えば家族と面会することもオンラインという形で行われるようになりました。でも、それで利用者さんは本当に満足されているのでしょうか？直接会って家族の元気な姿を見たい、直接会って孫の小さな変化に気づき成長を見守りたい方もいるのではないでしょうか。直接会うことで相手の細かい表情まで見え、より多くの情報や感情が伝わります。やはり"**会う**"ということは利用者にとって、ご家族にとっても励みになるので、直接面会するという仕組みを欠かすことはできないと考えています。

ー具体的にはどんな提案をされたのでしょうか？

例えば、建物の入口の前にある風除室を利用して、建物の中に入らなくてもエントランスホールで利用者とご家族がガラス越しに面会できるような仕組みを提案したこともあります。

また、通風・換気は機械でも行えますがそれだけではダメです。生活する空間は、24時間365日いる場所です。自然を取り込むことで光・風が人間に与える癒しの力は非常に大きいとコロナを通して、自然を取り込むことの大切さを改めて実感しました。

ーコロナ以外にも変化はありますか？

近年は、施設側も利用者側も求めるものが高くなってきているように感じます。例えば、ある高齢者施設では、パン工房やカフェ、地域をからめたイベントを行いたいという声もあります。こういう施設側からのソフト面での要望は十年前にはなかったですね。「高齢者の最低限の生活を保障する」という以前の感覚から、「毎日楽しく有意義に過ごせる環境を提供する」という感覚に変わってきていると感じます。

ー利用者の反応はどうですか？

昨年竣工した介護老人福祉施設を訪れたとき、施設のことを嬉しそうに教えてくれる利用者さんに出会いました。眺望を活かし広々とした海が見えるよう設計したお風呂の窓を、私が設計者だとは気づかずに、「ここのお風呂すごくいいから見て行きなよ～！」と施設について誇らしげに話す利用者さんの笑顔を見て、感動しました。利用者さんの自慢の施設になったことが嬉しかったし、これが私たちの目指すべきゴールだと再確認できました。

特別養護老人ホーム湯楽苑
Nagasaki , Japan

時代が変化しても変わらない"福祉研の想い"

ー改めて。福祉施設研究所の目指す建物とはどのようなものでしょうか？

私達は「人間の生活において最も重要な生活環境を変えたい」という想いで20年以上の間、新しい福祉施設の在り方を追求してきました。

そう考えるようになった背景には、とある特別養護老人ホームの施設を訪れた際の経験があります。当時の高齢者施設は、薄暗くて病院のような雰囲気の建物が多く、まさに「施設」といった感じの場所でした。

高齢者施設は高度成長期の日本を支えてきた方々がお仕事を引退し、ようやくゆっくりと過ごす、その人にとってはまさに人生の終盤を過ごす場所です。本当は**家族と過ごす**事が一番良い事ですが、やはり様々な事情がありずっと付き添っていては難しく施設での生活をする事になるわけです。

自分自身がそういう状況になったらどんな場所に住みたいでしょうか？どんな空間でくつろいでいたいでしょうか？

明るくて自然を感じる事ができる場所で、食事が出来、友人と楽しく会話する。自分の落ち着ける場所があって少し静かに過ごす事もできる。安心してサービスを受ける事ができ、快適な生活が続けられる。人それぞれの感じ方はありますが、何か一つでも**生活を豊かにする仕組み**や空間がある事で、とても楽しく快適な生活をすることが出来ると思うのです。

私達は、そういった提案をしたいと考えています。生活する空間は、24時間365日いる場所です。これまで最前線で活躍してきた方々の人生の最後だからこそ、楽しみを味わって毎日を送って欲しいし、その環境を作る私たちの責任はとても大きいと感じています。

何か一つでもいいのです。大切な時間を過ごす場所を、拘りを持って創り続けていきたいと思っています。

そして時代とともに求められる事も違ってきます。例えば、新築や建替だけではなく、環境負荷をできるだけ抑えたリノベーションをすることもあります。その土地・既存建物の魅力を見極め、そこに新たな価値を付加することで、事業的にも環境的にもサスティナブルな提案をしていきたいと考えています。

M village project
Aichi , Japan

SANCHI project / Tokyo , Japan
木造住宅を改修してグループホームにリノベーションするプロジェクト

\\ 福祉施設研究所 スタッフ紹介 //

OUR STAFF

日比野設計 福祉施設研究所　設計スタッフ
石山 裕貴　いしやま・ゆうき

生まれた時から耳に障害があるというバックグランドを持ちながらも日比野設計に入社。同じ境遇の人達の想いが分かるこそ、その人達のためにも社会貢献をしたく設計活動に励み5年目になる。趣味のデフサッカーでは、全国大会2連覇をしている神奈川県のチームに所属。仕事もプライベートも全力な石山さんにインタビューしました！

ー日比野設計に入ろうと思ったきっかけは何ですか？

そもそも設計者を目指そうと思ったのは、隣人の影響が大きいです。彼は建築家で、幼い頃から彼の家がすごく気になっていました。それをきっかけに小さいころから潜在的に建築が好きで、建築士になりたいと中学生から思っていました。

そして大学3年生の時、日比野設計福祉施設研究所の存在を知り、インターンシップに参加しました。障害がある方の想いが分かるこそ、その人達のためにも社会貢献をしたく、「ここなら自分のやりたいことに挑戦できる。」と感じ、日比野設計への入社を決意しました。

ー今はどのような仕事をしていますか？

今は千葉県の介護予防センターのプレゼンテーション、基本設計・実施設計、申請業務等を担当しています。ここではマシンだけでリハビリテーションを繰り返すだけではなく、料理や散策といった日常的な動作の中に楽しさを感じながらリハビリテーションを行える施設を計画をしています。リハビリテーションのあり方については、僕自身も疑問を持っていたので、お客様と共感することも多かったです。

ー仕事以外ではどんな活動をしていますか？

週末は「デフサッカー」をしています。デフサッカーは「音のないサッカー」とも呼ばれていて、耳に障がいを持った人達でプレーするサッカーです。現在は神奈川県のチームでセンターバックのポジションを務めています。

ーデフサッカーの面白さはどんなところにありますか？

手話をはじめとするジェスチャーやアイコンタクトを用い、お互いの声が聞こえない中でコミュニケーションを取り、一丸となって一つのゴールを目指すことですね。日頃からチームメイトとのコミュニケーションを欠かさないようにしています。

ーコミュニケーションという点で、仕事ではどういう工夫をしていますか？

手話は口語に比べ語彙の種類が少なく、**簡潔に説明する能力**が求められる一方、口語は話すスピードも早く、**詳細に説明する能力**が求められます。業務ではメールで改めて確認をしたり、お客様との打ち合わせは議事録を作って常に確認するようにし、工夫しながら業務に取り組んでいます。

ープライベートも仕事も充実している石山さん。最後に、仕事に対してはどんなモチベーションで取り組んでいますか？

今まではサポートをする側でしたが、今回新しい仕事を任せてもらえて嬉しく思っています。まずはその期待に応えたい気持ちでいます。今の物件を完成させ、一から自分で考えた建物が完成する喜びを味わってみたいです。そしてずっと支えてくれていた家族に報告し感謝を伝えたいです。

ープロジェクトの完成が楽しみですね！今後の石山さんに期待しています！

FUKUSHIKEN NEW PROJECT

なじみのある風景の中で安心して生活する

原風景と暮らす

●障害者支援施設ステージ桜が丘 小規模多機能型居宅介護事業所南風 / Kochi , Japan

老朽化による建て替えと小規模多機能型居宅介護事業所の津波対策高台移転プロジェクト。地域の福祉避難場所としての役割を担うため、普段から地域の方との隔たりをなくし、地域との繋がりを意識した施設としています。この地域の原風景をモチーフに「菜園スペース」、さわやかな香りを放つ「ゆずの庭」、気軽に外に出て太陽に当たることのできる「天日デッキ」等をデザインすることで、この地の昔ながらの風景や香りを感じながら安心・安全な生活ができる施設となります。

なつかしくてあたらしい多世代交流施設

特養を中心とした「出会いの街」

●シーサイドかなざわ / Kanagawa , Japan

「あたらしくてなつかしい港町」をコンセプトにした特別養護老人ホーム・デイサービス・フィットネスジム・カフェ・企業主導型保育・地域ケアプラザの複合施設です。少子化・高齢化・核家族化が進む計画地に魅力ある世代間交流の場と機会を作り出し、各世代の孤立化を防ぎ、互いに支えあう環境を作る試みです。地域ケアプラザの利用者、開放ゾーンで遊ぶ子ども達が運んでくる新しいモノ・コトと介護施設に入所・通所する高齢者の長年の経験が出会うことで、ここにしかない「出会いの街」が作られていきます。

農業とともに地域にひらいた

「どうぞ」の里

●M village project / Aichi , Japan

どうぞ、気軽に通り抜けを。どうぞ、ベンチでくつろいで。
地域に開いた遊歩道や市場・農場をデザインすることで、福祉について「わかってよ」と周りに求めるではなく、自然とお互いの事を理解し寄り添い合えるコミュニティが生まれます。施設入所支援・生活介護・短期入所・日中一時支援事業・相談支援事業・地域カフェ・コミュニティファームの複合施設として、「どうぞ」の新しいソフトが後押し地域に開かれた新しい福祉施設の環境が生まれます。

小さな山が連なる

みんなの公園

●K park project / Kumamoto , Japan

長年地域医療の中心を担ってきた医療法人が地域・世代をシームレスに繋ぐために行うデイサービス・児童発達支援・放課後等デイサービス・企業所内保育・病児保育・フリースペースからなる複合施設の計画です。この地域に自生する樹々や草花などを中心に植栽された小さな山のような建築が連なるこの公園は施設利用者と地域の人々が世代や性別にとらわれずに取り組めるプログラム等をきっかけに医療・福祉・療育・保育・教育がシームレスに繋がり、誰もが「自分の居場所がある」と感じることのできるみんなの公園となります。